■写真勉強会「誰でも撮れる、だからこそ学ぶ撮影のイロハ」

■2020年5月9日開催（日本リザルツ東京事務所）

■参加者

日本リザルツ職員、アカデミア、企業

■内容

新聞社での人材育成はどのようになっているのだろうか。講師によると、今新聞社に入ってくるカメラマンのほとんどは、写真をやったことがない人であり、彼らはジャーナリストや戦場カメラマンになりたいと言って入ってくるわけではない。「パワハラだと言われてしまうし、訴えられることもあり、自分のことを考えると指導するのは難しい。もっとも、1年か2年あれば、なんちゃってカメラマンにすることができる。逆に言うとその程度の仕事であり、写真を撮れない人はいない」。

カメラマンの仕事や業界も変わってきた。「フリーと社員のカメラマンの境目もどんどんなくなってきている。カメラマンと一般人の境目もなくなってきている」と講師は話した。講師によると、今は警察発表等よりもツイッターで一般の人が上げた事件事故の方が早い。紙媒体の需要が減り、インターネット・キュレーションメディアに対する売上は、取材に100万円、1000万円かけようがヘリを飛ばそうが、記事1本で百円単位にしかならない。

講師によれば、写真が斜めではなく水平であり、ピントが合っており、ブレがなければ、どのような写真でも違和感なく見える。「撮った写真は、トリミングをして構図を作り、色補正をして1枚を決めて欲しい。ファインダーを覗くときに傾くものなので、後から傾きを修正する。室内で撮るのであればマニュアル露出が良い。また、露出等のデータを組織の中で引き継ぐことが大切である」。